

大横綱の引退で思うこと

カルビーポテト株式会社馬鈴薯研究所所長 **もり 森 もとゆき 元幸**

大相撲の横綱白鵬が2021年秋場所後に突然土俵を去った。優勝45回の偉大な記録を打ち立てた大横綱であっても右膝の故障により限界に達して引退の時を迎えた。

ジャガイモの世界も大品種が引退の時を迎えている。北海道で栽培されるでん粉原料用品種「コナフブキ」は、20年以上も同用途の栽培面積1位であったが、2019年に種いも生産の基となる原原種配布数量が0となった。国際的な最重要害虫であるジャガイモシストセンチュウ抵抗性を持たないため種いも生産が停止され、「コナヒメ」など抵抗性品種に置き換えられることとなったためである。生産からでん粉製造まで関連業界が一丸となって品種交代にかじを切る英断を下した結果である。

加工原料用においてもカルビーグループは、2030年までにジャガイモシストセンチュウ抵抗性の国産原料100%を目指すとして内外に宣言し、総力を挙げて動き出した。加工原料用として栽培面積第1位の「トヨシロ」は、本線虫に抵抗性を有していない。加えて2010年の干ばつによる不作以降、夏季の生育限界を超える暑さや長雨により収量の不安定さが増している。「トヨシロ」の置き換えを目指し、温暖化に耐え、かつ油加工適性が優れる品種育成と新品種の原料採用に向けアクセルが踏まれている。

でん粉原料用や加工原料用は、総合的な能力の高い品種が勝利を収めてきた。ところが生食用は様相が異なり、100年以上前に導入された「男爵薯」と「メイクイン」が日本の東西に君臨している。これまで能力に優れる幾多の育成品種が、ブランド(感性)の壁に阻まれ、形が丸ければ「男爵薯」、長ければ「メイクイン」の呪縛に囚われてきた。そこで相撲に例えれば正攻法のガチンコ勝負に加え、小兵による多彩な技が仕掛けられた。ジャガイモの遺伝資源には肉色が濃黄、赤、紫の系統が存在し、これらを母本としてカラフルポテトが育成された。特に「インカのめざめ」は農業特性は劣るものの、消費者から良食味の評価を得て確固たる地位を築いた。「男爵薯」と「メイクイン」だけがジャガイモではなく、様々な品種があることを消費者に認知させた功績は計り知れない。2021年、農業特性を改良した新品種の赤肉「シャイニールビー」と紫肉「ノーブルシャドー」が、多彩な技を携えて加わり活躍に期待する。

ジャガイモは明治以降の新参者で食習慣の伝統が薄く、消費者から飽きられれば直ぐに衰退する。それが故に新たな挑戦は常に必要であり、食生活を豊かにしてきた。土俵に君臨する横綱品種に挑戦を続ける新品種の開発にエールを送りたい。